

「恐怖」を修飾する表現について

一直喩の果たす役割に着目してー

稲益 佐知子

1. はじめに

本稿では、「恐怖」を表す語彙に対し比喩的な連体修飾がなされる場合、どのようなタイプの比喩表現が用いられているのかについて調査する。

「恐怖」を表す語彙を対象とする理由はふたつある。ひとつ目は、「恐怖」を対象とした先行研究で一直喩に関する興味深い示唆があり、そこで指摘された内容をより広い資料で確認してみたいからである。もうひとつの理由は、目に見えないものである「恐怖」がどのように描かれるのかという点に稿者の興味があるからである。

2. 先行研究

以下は、楠見2005の「恐怖の言語表現」分類を稿者がまとめ直したものである。

◎恐怖の身体語彙：恐怖による表情、姿勢、内蔵、部位の変化を描写した換喩 (metonymy) によるもの、多くは慣用句 例) 顔を引きつらせる／身の毛がよだつ／心臓が速くなる等

◎恐怖の擬音語・擬態語：息や心拍などの身体的な音を言語音に移した擬音語に近い表現と、恐怖という心理状態を象徴的に表現した擬態語 例) ひゃー／ぶるっ／ぞくっ／どきり等

◎恐怖のメタファ：恐怖に固有のメタファ、感情一般に共通するメタファ、

恐怖を引き起こす状況を想起させる類推によるメタファ

このうち「恐怖の身体語彙」「恐怖の擬音語・擬態語」に類するものについて、本稿では「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」タイプとしてまとめる。

「恐怖のメタファ」は上述のとおり3分類されている。「恐怖に固有のメタファ」は、<恐怖を隠れた敵あるいは超自然的対象でたとえて、恐怖を襲ってくるもの、戦って克服するものとしてとらえる (23頁)> 表現であり、日本語例として「恐怖が忍び寄ってきた」「恐怖と戦う／を克服する」「恐怖が私をとらえた」があげられている。次ぐ「感情一般に共通するメタファ」も、いくつかの見方があげられ、それぞれの日本語例があげられている。両者の例を見て気づくのは、先にも触れた「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」タイプと言えそうな例があること、および、「恐怖」を文の骨組みに据えて動的な述語と対応させることによって、恐怖を目に見える能動的な存在ととらえさせる例があることである。前者には「感情一般に共通するメタファ」の「怖くて狂いそうだ／恐怖で生きた心地がしなかった／恐怖で一杯になった」がある。後者には「恐怖に固有のメタファ」の「恐怖が忍び寄ってきた／恐怖が私をとらえ

た、「感情一般に共通するメタファ」の「恐怖がのしかかる」がある。

さて、「恐怖のメタファ」の3点目「恐怖を引き起こす状況を想起させる類推によるメタファ」であるが、これについて楠見2005は「恐怖を引き起こす状況を記述して、読者にその身体経験を類推的に想起させる方法である。これらは、「のような」と明示的に状況を表現した直喩である(24頁)」と述べ、先の「恐怖に固有のメタファ」「感情一般に共通するメタファ」は隠喩だと述べている。概念としては「恐怖に類似した身体経験を引き起こす状況」としての「落下の恐怖」「体温を低下させる出来事」をあげ、前者例として「崖縁に足を踏み出すような」、後者例として「総身に冷水をあびせられたような」等をあげる。また、「悪魔や怪物、お化け、妖怪に襲われる場面をとととして用いる表現」もこの括りとし、例として「悪魔の息づかいが聞こえるような」等をあげる。

「落下」「体温低下」で表現されている内容は「身体体験」という点で「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」と共通するが、換喩のプロセスを経た「結果」ではない。当該の表現を、連体修飾句に当てはめて考えるとわかりやすい。連体修飾関係をいわゆる「内の関係」ととらえるのか「外の関係」ととらえるのかというテストを行うのである。「顔を引きつらせる恐怖」は、「恐怖が顔を引きつらせる」という格関係が成り立ちえる「内の関係」であるが、「崖縁に足を踏み出す恐怖」はそのような格関係をとれない「外の関係」である。

楠見2005が「恐怖を引き起こす状況を想起させる類推によるメタファ」とした一群を、本稿では「恐怖を引き起こす状況」タイプと名付ける。「外の関係」の修飾構造をとるこのタイプは、被修飾部である「恐怖」と格関係を持たない。つまり、格関係に縛られず、修飾部を詳しく記述することが可能である。このタイプが楠見2005の述べるとおりの直喩であることを特徴とするのかどうか、実例で確認することとした。

最後に、「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」「恐怖を引き起こす状況」のどちらにも属さない一群を別タイプとして立てておきたい。楠見2005の用例の一部は中村1993に拠っている。稿者は、中村1993・2013でとりあげられた、ある表現に着目する。〈堀田善衛の『鬼無鬼島』に「その恐怖のかたちをあらわに眼で見るとなれば、生温かく血まみれな、ぐにやりとしたもの」とあるのは、恐怖の心情という抽象的な存在を、温度感覚や触覚的なイメージで大胆にとらえた、極度に感覚的な比喩表現である。(中村2013、254頁)〉。ここで指摘されているのは、稿者の興味的一端である、目に見えないものである「恐怖」がどのように描かれるのかという問いに対するひとつの答えであり、先の楠見2005とは異なる視点であると思われる。このタイプを本稿では、「恐怖そのものの様相」タイプと名付け、先の2タイプと区別する。このタイプの中には、上記中村2013例のような非常に技巧的なものから、形容詞に係る程度のもので、幅広いものが含まれる。また、「様相」というよりは「程度」

と言った方が妥当な例も含まれる。だが本稿ではひとまずそれらを一括してこのタイプにおさめることとする。

3. 調査方法と対象

本稿では、「恐怖」を表す語彙と連体修飾部との関係が比喩表現となっている用例を採集・分析する。

対象は現代日本語とし、現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下「BCCWJ」)ならびに恐怖に関わるテーマで編まれた文学作品アンソロジー(以下「文学アンソロジー」)から用例を採集する(BCCWJおよび文学アンソロジーの詳細については本稿末尾「資料」を参照)。

現代日本語の定義は一考を要するところであるが、本稿では明治期以降に書かれたものを対象とする。これは、BCCWJの採録基準に準じる。なお、文語文で書かれたもの、韻文、翻訳(古典語訳を含む)は対象外とする。

採集対象とする「恐怖」を表す語彙は、最も端的な表現かつ名詞相当の「恐怖」に加え、「恐怖心」「恐怖感」「恐ろしさ」「恐れ」も対象とする。各種異表記(「怖れ」等)も対象とする¹⁾。

なお、BCCWJの調査では、ジャンルによる違いも考察に入れる。BCCWJの各レコードには当該書籍のNDC分類が付されているため、NDC分類「9文学」とそれ以外に分けることができる²⁾。

分析にあたっては、ここまで述べてきたように、「恐怖」を表す語彙の連体修飾部を、その意味内容から「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」「恐怖を引き起こす状況」「恐怖そのものの様相」に分ける。その際に、連体修飾部が比喩

指標(「ヨウナ」等)によってまとめられているか、すなわち直喩の連体修飾部となっているかどうかも考慮する。さらに、文の骨組みが隠喩となっているかどうかについても着目する。

4. BCCWJの調査

4.1 直喩の連体修飾節の場合

33例が得られた。うち、比喩指標が「ヨウナ」である例が29例、他の比喩指標が4例であった。他の比喩指標の例については本節の最後にまとめて触れることとし、まずは「ヨウナ」29例について分析していく。タイプ別の内訳は、以下のとおりである。

◎「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」…11例

◎「恐怖を引き起こす状況」…15例

◎「恐怖そのものの様相」…3例

「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」の11例はいずれもNDC分類「9文学」だった。定型的な表現(例1)、擬態語と併用したわかりやすい例(例2)が見られる一方で、修飾部自体が隠喩という複雑な例(例3)も見られた³⁾。

(例1) 奥地と聞くだけで、さよは総毛立つような恐怖をおぼえた。(原田康子『海霧 上』9文学; PB29_00152)

(例2) ガフの背筋がぞっと凍りつくような恐ろしさに震えた。(沖方丁『ばいばい、アース 下』9文学; LBo9_00125)

(例3) おぞましさに激しい吐き気がこみ上げてきたが、吐こうとして口を大きく開いた瞬間、自分の内部が瘴気に冒されるような恐怖感から、こみ上げてくる胃液を必死に燕下し

た。(吉村夜『マンイーター』9 文学；PB19_00055)

「恐怖を引き起こす状況」の15例には、他のNDC分類も見られた(NDC分類9が8例、9以外が7例)。修飾部が細かい状況説明となるのが特徴的で(例4)、先に「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」で見られたのと同様、修飾部自体が隠喩となる例(例5・6)も見られた。

(例4) 同じ東京に住み、同じように毎日生活し、日頃何げなくさまざまな接触を繰り返している現在の多くの東京の住民たちが、ぼくと全く異質の都市認識と感覚を内に抱いているということは、考えてみるとおそろしいことである。ぼくはワイザツな都会の中で敵意を秘めた異人種たちに囲まれて孤立しているような恐怖さえ感じたのである。(奥野健男『文学は死滅するか 奥野健男自選評論集』9 文学；LBe9_00210)

(例5) 私のことをなぜか憎めないので困ると言ったという彼の妻の言葉を、何かの拍子でふと彼の口から洩らされた時、私はかえって目に見えない憎悪の炎を吹きつけられたような恐怖に、鳥肌立ったのを覚えている。(瀬戸内寂聴『場所』9 文学；PB19_00570)

(例6) 昔はゲームソフトが欲しくて欲しくて仕方なかったのに、ソフト屋赤兵衛が潰れる頃になると、ソフトというソフトに足が生えて僕の方に近づいてくるような恐怖感を感じるようになった。(クーロン黒沢『マイコン少年さわやか漂流記』5 技術・工学；PB35_00252)

さらに、楠見2005が指摘する「悪魔や

怪物による恐怖」に通ずるモチーフ(例7)も多く見られた。

(例7) 吹雪が横殴りに叩きつけ、その烈風に小屋が揺れつづける夜があった。それは大自然の脅威というより、何か未知の魔物に襲われたような恐怖を、乙女にもたらした。(宮本昌孝『青嵐の馬』9 文学；LBm9_00241)

「恐怖そのものの様相」の3例は、2例が「9 文学」、1例が「2 歴史」だった。中村2013のような独創的な例ではないが、まずはこのタイプが存在するというを示しておきたい(例8)⁴⁾。

(例8) フジオミは手をつかまれたまま、恐怖のどん底につき落とされた。本能的な、そして真の暗闇そのものような恐怖が、手といっしょに全身をつかまえていた。(大原まり子『タイム・リーパー』9 文学；LBm9_00036)

以上は修飾部に着目した分類だが、別途着目したい観点がある。それは、先に述べた、被修飾部＝「恐怖」を表す語彙と、文の骨組みとの関係である。この関係が隠喩となっている場合が、「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」に4例(例9・10)、「恐怖そのものの様相」に2例(例11)、それぞれ見受けられる。(該当部分は四角囲みで示す)。

(例9) じわじわと肌が粟立つような恐怖に、暫く練はからめ捕られていた。(恩田陸『上と外 2』9 文学；LBo9_00100)

(例10) 吐気をもよおすような恐怖が、ぬらっと三人の父や祖父を襲う。(山田風太郎『魔界転生 上』9 文学；

LBn9_00242)

(例11) ※例8の一部

本能的な、そして真の暗闇そのもののような**恐怖が**、手といっしょに全身を**つかまえていた**。(大原まり子『タイム・リーパー』9 文学；LBm9_00036)

これらは文の骨組み全体としては隠喩の文であり、そこに直喩の連体修飾節が含まれている。「恐怖」を表す語彙が述部と格関係を形成している→両者の意味関係は隠喩→さらに「恐怖」を表す語彙を「ヨウナ」等でまとめられた連体修飾節が修飾している、ということである。このような構造について、本稿では以下「隠喩との二重構造」と呼ぶ⁵⁾。

なお、「隠喩との二重構造」は、「恐怖を引き起こす状況」タイプには見受けられなかった。先に述べたように、「外の関係」の修飾構造をとれる「恐怖を引き起こす状況」タイプは、被修飾部である「恐怖」と格関係を持たない。つまり、格関係に縛られず、修飾部を詳しく記述することが可能である。そのためか、同タイプには、修飾部自体が隠喩であるものも多い(例5・6参照)。細かい状況説明が隠喩の体をなしているわけである。修飾部がそのようなタイプの隠喩、かつ文の骨組みも隠喩というのは、比喩性の度合いにもよるだろうが、かなり技巧的なものになるだろうという印象を受ける。だが、「隠喩との二重構造」において、隠喩が表している内容は必ずしも突飛なものではない。例9～11における「恐怖」を表す語彙と述部との関係は、楠見2005で取り上げられた「恐怖の概念メタファ」—恐怖は襲ってくるもの、戦って克服する

もの等—にあたる、つまり、概念として馴染みのあるものである。比喩という技巧を使用する際の絶妙なバランス感覚が、今回の調査結果から透けて見える。

最後に、「ヨウナ」以外の比喩指標について述べる。計4例であった。

- ◎「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」…2例(「ホドノ」、「ソウニナル」)
- ◎「恐怖を引き起こす状況」…1例(「ソウナ」)
- ◎「恐怖そのものの様相」…1例(「ニヒトシイ」)

上記のうち、「恐怖を引き起こす状況」の「ソウナ」1例のみ、連体修飾部自体が隠喩であった。また、NDC分類が「9文学」でないのも「ソウナ」例のみである。一方、文の骨組みとの関係が隠喩となる「隠喩との二重構造」例だが、「恐怖そのものの様相」1例が隠喩かどうかの境界であり、他の例は明らかに隠喩ではなかった。指標による偏りが存在する可能性はあるものの、出現傾向については「ヨウナ」同様ではないかという感触が得られた。

4.2 隠喩の連体修飾節の場合

16例見られた。内訳を以下に示す。

- ◎「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」…2例
 - ◎「恐怖を引き起こす状況」…3例
 - ◎「恐怖そのものの様相」…11例
- 直喩の連体修飾節とは異なり、「恐怖そのものの様相」が最も多いという結果となった。楠見2005の指摘どおり「恐怖を引き起こす状況」は少なかったが、「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」も決して多いとは言えない。

「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」の2例はいずれもNDC分類「9 文学」だった。いずれも定型的な表現であり、うち1例は文の骨組みが隠喩である。

(例12) 切断音—と知って、オーマの背筋を血も凍る恐怖が渡った。(三田誠『虎は歪める』9 文学；LBp9_00116)

例12については、「隠喩との二重構造」の別のタイプ、すなわち、隠喩が隠喩を含むタイプと考える。ただ、文の骨組みの隠喩〈恐怖が渡った〉は、文脈全体で見るとさほどの比喩性は感じられない。修飾部〈血も凍る〉は「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」タイプの典型例であり、恐怖が〈渡る〉場所はこれもよく用いられる〈背筋〉である。これらのことから、当該表現の比喩性が著しく強いとは感じられない。複数の比喩表現が使用されているものの、そのうちの何かが突出して目立っているとは考えにくいのである。

「恐怖を引き起こす状況」3例は、NDC分類9が2例(例13)、9以外が1例(例14)だった。ただし、比喩性に関していえば、NDC分類9以外の例14が最も比喩性が高く思われた。文の骨組みも隠喩であり、「隠喩との二重構造」例である。

(例13) この人も苦しんでいたんだ。この一年間、魂を封じられた私の横で。誰からも見捨てられ、忘れられ、朽ち果ててゆく恐怖に怯えながら。(和田賢一『ヴァロフェス』9 文学；PB39_00701)

(例14) (前略) 楠勝平は迫り来る死の足音を強く意識した『あらさのさあー』『ぼろぼろぼろ』を発表する。死という巨大な虚無に呑み込まれる恐怖を、それまで身につけてきた伎倆でねじ伏

せようとする気迫は、読む者を圧倒する。(呉智英『マンガ狂につける薬21』7 芸術・美術；PB27_00115)

直喩で連体修飾する「恐怖を引き起こす状況」タイプにおいては、「隠喩との二重構造」はなかったもので、例14は初めてのタイプの複合例と言える。たしかに例14には技巧的な印象を受ける。しかし、文の骨組みの隠喩が表している内容は「恐怖は戦って克服するもの」という「恐怖の概念メタファ」にのっとったものであるため、その点においては馴染みのある表現となっている。

「恐怖そのものの様相」は11例と多く、先に述べたように形容詞レベルのものから能動性の高い句レベルものまで幅広い。NDC分類は、10例が「9 文学」、1例のみ「2 歴史」である⁶⁾。

以下、「隠喩との二重構造」となっている例をあげておく。

(例15) なんでもないと打ち消しながらも、淡い恐怖が胸底で脈打っている。(夏樹静子『訃報は午後二時に届く』9 文学；PB49_00177)

(例16) 柔らかくて小さな手。トクトクと彼女の手から伝わってくる鼓動。その鼓動のリズムが、今まで暗闇の中から勝手に僕が拾い出し、とめどなく溢れていた恐怖をせき止めてくれます。(おかゆまさき『撲殺天使ドクロちゃん』9 文学；PB49_00460)

例16はやや技巧的であるが、目立つのは〈恐怖をせき止めてくれます〉という文の骨組みよりもむしろ、修飾部前半の〈暗闇の中から勝手に僕が拾い出し〉という部分だろう。この例では、文の骨組みを〈恐怖〉〈をせき止めて〉とすることによ

て、〈恐怖〉を手にとれる、目に見えるものとして実体化しているのではないか。この〈恐怖〉の実体化によって、修飾部前半の〈暗闇の中から勝手に僕が拾い出し〉とのバランスがとれ、表現全体としてまとまりが出るのだと考えられる。

5. 文学アンソロジーによる調査

BCCWJでの調査をふまえ、文学アンソロジーに調査を広げた。得られた用例も少ないため、全例をあげる⁷⁾。

先に述べておくと、「恐怖を引き起こす状況」タイプは直喩の連体修飾にも隠喩の連体修飾にも見られなかった。

5.1 直喩の連体修飾節の場合

「ヨウナ」例が3例見られた。他の指標例は見られなかった。3例のうち、2例を「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」(例17・18)、残りの1例を「恐怖そのものの様相」(例19)と判断した。「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」の例18と「恐怖そのものの様相」の例19には、文の骨組みが隠喩である「隠喩との二重構造」が見られた。

(例17) ふと静寂に気がつきました。
とびたつような怖ろしさがこみあげ、ぎょっとして振向くと、女はそこにくらかやる瀬ない風情でたたずんでいます。(坂口安吾「桜の森の満開の下」妖494)

(例18) ダーク・ボガードとヘルムート・グリーンが自動車に揺られるシーンである嫌な匂いがはじめ、ヘルムート・バーガーが女装して「ローラ」を歌い始めると体が冷たくなって行くような恐れが私の中で波立ちなが

らせり上って来るのである。(久世光彦「人攫いの午後 ヴィスコンティの男たち」リ399)

(例19) ただ何かしらなまなましいまざまざしたものがあった。私は全身が総毛立つのを覚えた。咄嗟に私は身をひるがえ翻した。(中略) 所が私がそういう気配を見せるや否やそのまざまざとしたものの執拗な意志で私は後髪をひかれるような恐怖に落込んだ。水を浴びせられたような悪寒を受けた。私は逃げた。(島尾敏雄「摩天楼」視454)

例19は、目に見えない「恐怖」について〈後髪をひかれるような〉という直喩による修飾を加えることによって、「そのような性質を持つもの」である「恐怖」を実体化させるさまが伺える。さらに言えば、「後髪をひかれる恐怖」では抽象度が強すぎるため、ここでは比喩指標が必要なのではないだろうか。このことは後述する。

5.2 隠喩の連体修飾節の場合

3例見られた。うち2例を「恐怖そのものの様相」(例20・21)、残る1例を「恐怖によって起こる肉体的・精神的変化」と「恐怖そのものの様相」の混合例(例22)と判断した。

(例20) (前略) ホラームービーを見ているとわたしは安らかな気持ちになった。恐怖に恋したみたいに、中毒になってアルコールや薬を求めるみたいに、私はパッケージされた恐怖が欲しかった。(川口晴美「壁」リ628)

(例21) そんな圧倒感と、靴からじわじわとしみこんでくる水の感触に、弥生ちゃんは足元から這い上がってくる恐怖を感じていた。(乙一「夏と花火と私

の死体」こ393)

(例22) 弥生ちゃんは背中を這い上がってくる冷たい**恐怖と戦いながら**、がたがたと震える足を押さえて、塀の向こう側に居るはずの健くんはその事を伝えようとした。(乙一「夏と花火と私の死体」こ397)

例22は、先にBCCWJでも見た「隠喩との二重構造」の別タイプ、すなわち隠喩が隠喩を含むタイプと認めることができる。ただ、文の骨組みの隠喩〈恐怖と戦いながら〉が楠見2005「恐怖の概念メタファ」にのっとっていること、修飾部の隠喩〈背中を這い上がってくる〉が数頁前(例21)で既出であること、修飾部〈冷たい〉は「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」タイプの典型例であること、これらから鑑みて、当該表現の比喩性が著しく強いとは思われない。つまり、例22においても、複数の比喩表現が使用されているものの、そのうちの何かが突出して目立っているとは考えにくいのである。比喩という技巧を使用する際の絶妙なバランス感覚が、ここにも見受けられるように思われる。

同じ「隠喩との二重構造」である例19(修飾部が直喩)と例22とを比べると、表現としての難解さは例19が上であろう。例19は比喩指標を用いて「これは比喩である」と明示することで、表現全体としてのバランスを保っているのではないかと推察される。

6. おわりに

本稿では、「恐怖」を表す語彙の連体修飾部を、その意味内容から「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」「恐怖を引き起こす状況」「恐怖そのものの様相」

の3タイプに分け、直喩が用いられやすいかどうかを確認した。楠見2005の指摘のとおり、「恐怖を引き起こす状況」には直喩が多かった。ただ、「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」についても直喩の方が多く、「恐怖そのものの様相」は隠喩が多かった。

さらに、「恐怖」を表す語彙と文の骨組みとの関係にも着目し、「隠喩との二重構造」を指摘した。「隠喩との二重構造」は「恐怖によって起こる肉体的・精神的变化」「恐怖そのものの様相」とは一緒に用いられるが、「恐怖を引き起こす状況」とは用いられにくいことがわかった。

以上はBCCWJの分析結果であるが、これをふまえ、文学アンソロジーも調査した。文学アンソロジーにおいては、「恐怖そのものの様相」を直喩隠喩問わず描写し、文の骨組みに隠喩を用いることで目に見えない「恐怖」を実体化する傾向がより強く伺えた。一方、「恐怖を引き起こす状況」は見られなかった。

最後に、比喩表現を含む文には、文全体としてのバランスを保つ意識が反映されているようだということが、今回の調査・分析を経て得た感触である。そして、5.2節の最後に述べたように、そこに比喩指標の有無も関わっているのではないかと推察される。直喩と直喩でないものの違いがそこに見出せるのではないかと推察され、今後の見通しである。ジャンル・文体差も視野に入れ、検討を続けたい。

注

- 1)「恐怖心」「恐怖感」以外の複合名詞、「～恐怖の経験」「～恐怖と不安」のように「の」「と」等を介して別の名詞に

接続しているもの、「～ような+形容詞+恐怖」のように比喩指標と「恐怖」を表す語彙の間に明らかに別要素が入っているものは対象外とした。今回問題にしている連体修飾部と「恐怖」を表す語彙との意味関係を一意に決め難いためである。また、引用内についても対象外とする。

- 2) エッセイ等がNDC分類「9 文学」以外に出現する場合もあるが、ここでは便宜的にNDC分類「9 文学」とそれ以外に分けて考察する。
- 3) 傍線・太字・囲みは稿者によるが、それ以外の表記はBCCWJの仕様のまま(文区切り記号等は削除)。()内は執筆者(執筆者以外の編著者は適宜表示)、書名、ジャンル、サンプルID。
- 4) 次の例は慣用的であるが、「ヨウナ」があることで比喩性が増すと考え認めた。
・「様相」2例目：その意識は、いままであたしが感じたこともないような恐怖に包まれていた。(岡嶋二人『コンピュータの熱い罨』9 文学；LBp9_00076)
また、次の例は「内の関係」にはなりえない。「様相」内における内外の区別については今後あらためて考えたい。
・「様相」3例目：髪の毛は逆立ち、目玉はギョロリとして、髭も生やし、まるで仁王像のような恐ろしさを湛えた画像だ。(童門冬二『宮本武蔵』2 歴史；LBq2_00082)
- 5) 複合的な比喩の存在については多門2006をはじめ多くの指摘がある。本稿では稲益2004での「多層構造」という考えを引き継いで「隠喩との二重構造」という言葉を用いる。
- 6) この11例には慣用的と判断したもの

は入っていない。それらには「襲う～」類型の他、「言い知れない～」「底知れない～」「感じたことのない～」等の「未知・無限」とでも呼ぶべき類型がある。

- 7) 傍線・太字・囲み・略記号は稿者によるが、それ以外の表記は各アンソロジーの編集方針のまま。()内は執筆者、作品名、アンソロジー名略称(「資料」参照)、アンソロジー頁。

資料

BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス) 国立国語研究所コーパス開発センター作成。対象としたコーパスは、出版(生産実態)サブコーパスのうちの書籍サブコーパス(PB)、および図書館(流通実態)サブコーパス(LB)。同サブコーパスの詳細については以下のURLを参照。

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/basic-design.html

検索には「中納言」2.1.0を使用した。

文学アンソロジー

(恐) 安野光雅・森毅・井上ひさし・池内紀編2011『恐ろしい話』ちくま文学の森6(筑摩書房)

(こ) 北村薫編2012『こわい部屋——謎のギャラリー』ちくま文庫

(妖) 東雅夫編2013『日本幻想文学大全 幻妖の水脈』ちくま文庫

(視) 東雅夫編2013『日本幻想文学大全 幻視の系譜』ちくま文庫

(リ) 高原英理編2014『リテラリーゴシック・イン・ジャパン——文学的ゴシック作品選』ちくま文庫

用例採集対象作品は以下のとおり。

(恐) 田中貢太郎「竈の中の顔」志賀直哉「剃刀」菊池寛「三浦右衛門の最後」

岡本綺堂「利根の渡」夢野久作「死後の恋」木々高太郎「網膜脈視症」武田泰淳「ひかりごけ」

(こ) 小熊秀雄「お月さまと馬賊／マナイタの化けた話」林房雄「四つの文字」樹下太郎「やさしいお願い」乙一「夏と花火と私の死体」

(妖) 夏目漱石「夢十夜」幸田露伴「観画談」泉鏡花「高野聖」折口信夫「死者の書」内田百閒「冥途」佐藤春夫「女誠扇綺譚」江戸川乱歩「押絵と旅する男」葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」稲垣足穂『一千一秒物語』より「月から出た人／A MEMORY／黒猫のしっぽを切った話／ポケットの中の月／月光密造者／A TWILIGHT EPISODE／コーモリの家／A MOONSHINE」久生十蘭「予言」坂口安吾「桜の森の満開の下」日影丈吉「月夜蟹」三島由紀夫「仲間」澁澤龍彦『唐草物語』より「火山に死す」都筑道夫「風見鶏」小松左京「牛の首」(視) 泉鏡花「化鳥」小川未明「牛女」萩原朔太郎「猫町」谷崎潤一郎「魔術師」夢野久作「木魂」室生犀星「蜜のあわれ」芥川龍之介「妙な話」宮沢賢治「ひかりの素足」川端康成「片腕」梶井基次郎「Kの昇天」渡辺温「父を失う話」中島敦「文字禍」埴谷雄高「虚空」吉田健一「百鬼の会」島尾敏雄「摩天楼」中井英夫「地下街」安部公房「デンドロカカリヤ」吉村昭「少女架刑」赤江瀑「春の寵児」倉橋由美子「巨利」

(リ) 泉鏡花「絵本の春」宮沢賢治「毒もみのすきな署長さん」江戸川乱歩「残虐への郷愁」横溝正史「かいやぐら物語」小栗虫太郎「失楽園殺人事件」三島由紀夫「月澹荘綺譚」倉橋由美子「醜魔

たち」塚本邦雄「僧帽筋」中井英夫「薔薇の縛め」澁澤龍彦「幼児殺戮者」須永朝彦「就眠儀式 Einschlaf-Zauber」金井美恵子「兎」吉田知子「大広間」竹内健「紫色の丘」赤江瀑「花曝け首」山尾悠子「傳説」古井由吉「眉雨」皆川博子「春の滅び」久世光彦「人攫いの午後 ヴィスコンティの男たち」乙一「暗黒系 Goth」伊藤計劃「セカイ、蛮族、ぼく。」桜庭一樹「ジャングリン・パパの愛撫の手」京極夏彦「逃げよう」小川洋子「老婆J」大槻ケンヂ「ステシー異聞 再殺部隊隊長の回想」倉阪鬼一郎「老年」金原ひとみ「ミンク」木下古栗「デーモン日暮」藤野可織「今日の心霊」中里友香「人魚の肉」川口晴美「壁」高原英理「グレー・グレー」

引用文献

- 梶見孝 2005「物語理解における恐怖の生起メカニズム 一怪談とメタファー—」
「表現研究」82(表現学会)
多門靖容 2006『比喩表現論』風間書房
中村明 1993『感情表現辞典』東京堂出版
中村明 2013『比喩表現の世界 日本語のイメージを読む』筑摩書房
稲益佐知子 2004「直喩表現の研究方法についての一試案—梓組みの提示と分析—」
「文体論研究」50(日本文体論学会)

付記

本稿は、第52回表現学会全国大会(2015年6月7日 於：県立広島大学サテライトキャンパスひろしま)での口頭発表をもとに加筆・修正した。貴重なご意見をくださった皆様に感謝申し上げます。

(日本体育大学非常勤講師)